フケタロウ

こうじ

あらすじ

極端なフケ症の金平夫妻は、フケでいつも頭が富士さんの様に真っ白。

そんなフケ症を抱えながらも、金平夫妻は前向きに暮らしていた。

だが、そんな夫妻にとって最大の悩みは、結婚後十年経っても子供に恵まれない事だった。

そんなある日、妻の清美が白魔術を使って子供を作ると言い出す。

夫の良純は半信半疑だったが、清美に促され、フケをかき集め人形を作り祈りを捧げる。

すると不思議な事に、本当に人間の子供の様になる。

喜ぶ夫妻だったが、その子供は姿形こそ子供だったがどこか変だった。

登場人物

人　物

フケタロウ　フケで作った子供

金平良純　（３５）　会社員

金平清美　（３２）　妻　　専業主婦

多真雄　（７６）　商店会会長

1　富士さん

A子「金平さんの頭、富士さんみたい」

節電対策の為、社内の冷房を弱められ、呆然としていた良純だったが、新入社員のA子の一声に我に返り、周囲を見渡すと不自然な同僚の視線が、良純の頭上に注がれていた。

A子以外は暗黙の了解かの様に、同僚は一瞥するも、すぐに仕事を再開した。良純は暫くロボットの様にキーボードを叩いていたが、昼の放送が流れると同時に、喫煙室に行く振りをして階下の食堂のトイレに駆け込んだ。

一番奥のトイレに入ると、スーツから手鏡を取り出し、ゆっくりと自身の頭上を映した。

良純「また増えたな……」

手鏡に映し出された良純の頭上には、頭頂部から生え際まで

の三分の二が白いフケで覆われていた。

良純はひとしきりフケの出具合をチェックすると、慣れた手つきでトイレットペーパーをターバンの様に巻き、その場で数回、ジャンプした。

その後、便座のフタを上げ、深呼吸を一回すると、便器に向かって勢い良くお辞儀をした。

「ジャポン！」

便器の中が一瞬にして真っ白なフケの山で覆われた。

良純はフケの量を確認すると、便器のハンドルを大の方へと回し、何事もなかったかの様にトイレから出て行った。

2　清美

良純の家は、都心から電車で一時間半ほどの、海沿いにある一軒の古民家である。おばあちゃん子である良純が、祖母から譲り受けたものを再生したものだ。

この一時間半ほどの通勤時間を、実際は二時間以上はかけて良純は通勤していた。

原因はやはり、フケである。良純のフケは三十分周期で、大量に発生する。その為、発生する少し前には途中下車して駅のトイレに駆け込むのだ。

特に朝の通勤ラッシュ時には、嫌でも他人と接触しなければならない。そこに電車の揺れも相まってフケが降り注いだ日には、大変な事になる。

ある時、良純の前で座って眠っていた中年女性が、（この時は良純も立ったまま寝てしまったので、フケの発生に気付かず、女性に降り注いでしまった）目的地に着き駅を下りた所小学生達から「雪だるまだ！」と言われ、鏡に映った自分の姿を観て、そのまま気絶してしまった事がある。

ほかにも例をあげればきりがないが、このご時世で、今まで裁判沙汰にまでならなかった事がせめてもの救いだ。

良純「ただいま」

帰ってきた時には夜の八時を過ぎていた。それでも朝よりは、途中下車する回数も少ないので、早かった方だ。

清美「あら、早かったね」

玄関の扉を開けると、ほっかむりに雑巾を持った清美が
扇風機の前で突っ立っていた。

良純「また大掃除か」
清美「だって、私の趣味だもん」
良純「だからって、なんでこんな時間に」
清美「気になるのよ」
良純「まあいいや、お腹空いた。ご飯は？」
清美「昨日の残りがあるから、用意するわ」
良純「トマトカレーか……」
清美「いらないなら、何もないけど？」
良純「お願いします……」

清美のトマト好きには困ったもので、料理に必ずトマトが
入っている。不味くはないが、トマト星人にでもなってし
まいそうだ。

清美は料理を作る為、ほっかむりを脱いだ。清美の頭には
十センチ程のフケが積もっていた。

3　出会い

清美との最初の出会いは、大学病院の皮膚科の診察室だった。

医師「今日はどうしましたか？」
良純「ちょっとフケで悩んでまして」
医師「フケですか？　じゃあ、その帽子を取ってもらえますか？」
良純「それが普通の量ではなくて……」
医師「みなさんそう言われるのですよ。さあ、帽子を取って」
良純「ホントに量が多くて」
医師「恥ずかしがらなくていいですよ。はい、取りますよ！」
良純「ちょっと待って、あ！」

帽子を素早く脱がされた勢いでフケが舞い、医師は瞬く間に真っ白になってしまった。医師は驚きよりも、暫く呆然としていた。

「きゃー！！」

何より驚いたのは、隣の診察室から聞こえてきた看護婦の悲鳴だった。

隣の診察室を覗くと、同じ様に真っ白になった医師と看護婦がいた。そして、その中央で頭の上にフケを乗せた清美が、私の事を泰然とみつめていた。

清美とはこの大量のフケが縁で、フケの事を相談し合う内に、交際へと発展した。

医師の見解では、この大量のフケは突発性のもので、主に二十代から三十代の男女が発症するらしく、過去に数件の症例があるものの原因は不明で、ほとんどの患者が五年もすると自然に症状が緩和するとの事だった。

ともあれ、運命共同体の様なパートナーに巡り会えた事は
心の支えにもなった。

近所からの誹謗中傷はあるものの、金平夫妻は充実した
毎日を送っていた。だが、十年経った今も相変わらずフケ
は治まらなかった。

しかし、金平夫妻にとってフケは、今や家族の一員の様な
もので、もはや悩みの種ではなくなっていた。

金平夫妻にとって、本当の悩みは、別の所にあった。それは
未だに子供に恵まれない事だった。

そんな日々を送っていたある満月の晩、寝床についた良純の
所へ、清美がやってきた。

清美「子供が欲しい……」

いつもの柔和な顔つきからは想像出来ない程、ドライアイスの様に冷えきった表情をした清美が良純の布団に潜り込んできた。

良純「あせる事ないよ」
清美「分かってるけど……」
良純「子供は授かり物だから」

心もとない親戚からは、「夜の夫婦生活はどうなんだ？」と、聞かれることも事も多々あったが、良純と清美は充分に愛し合っていた。むしろ普通よりも多いほどだった。

ならば、病気ではないのかというと、二人とも至って健康体であった。

妊娠に結びつく様な努力は、これまでにありとあらゆる事をした。しかし、どれも駄目だった。

清美「私ね、白魔術の先生に良いこと聞いたの」

　　布団の中で良純に抱きつく清美の目が爛々と光り輝いていた。

清美には大掃除の趣味の他に、UFO鑑賞や超能力開発などの
サブカルチャー好きがある。

白魔術は、清美が通い出したカルチャースクールで習ったもので
三年かけて修了した。講師がとてもいかがわしい爺さんで、
良純も一度だけ清美の手前、爺さん主催の自宅にまねかれての
食事会に参加した事がある。

ポッキーと缶ビールが振る舞われて、参加費一万円というボッタ
クリバーの様な食事会だった。

清美「私達のフケを使って、子供を作るの」
良純「はあ？」
清美「先生に教わった最大の秘術よ」
良純「先生って、あのインチキ爺さんだろ」
清美「白魔術は本物よ」
良純「そんなの嘘に決まってるだろ」
清美「いいから手伝って！」

普段はおとなしい清美だが、やると言い出したら必ず実行する。
そんな所が好きになって結婚したのも事実なのだが、まさか
自分達のフケを白魔術で子供にするとは、なんともいかがわ
しいではないか。

清美は押し入れから一抱えもあるフロシキを持ってくると
私の前に差し出した。

清美「一ヶ月前から溜めてたの」
良純「何を？」
清美「フケよ」

清美はそう言うと、フロシキの包みを解いた。

中からは直径一ｍ　はある、雪だるまの様なフケの塊が出てきた。

いつも自身のフケで周りを驚愕させてきたが、初めてその気持ち
が理解出来た。

ここまで読んでくださった読者の方々の中には、嫌悪感を抱いた方や、自身がフケで悩んでおられた方もいたでしょう。その様な方には、心よりお詫びいたします。

尚、弁解するのなら、金平夫妻のフケは一般的に言われているフケとは性質が全く異なり、無臭でサラサラしていて、固めると紙粘土の様になるが、見た目には雪の様に真っ白で、不潔感は全くありません。量が尋常でないだけで。

物語も中盤に入り、金平夫妻は、このフケと白魔術を使って、子供を作ります。しかし、その作り方に関しては白魔術の知識も浅はかな事と、思いついた映像がそれこそ不快な為、省略させて頂く事にしました。

そして、勘の鋭い方の中には、岩手の昔話「力太郎」に似ていると思われた方もいるでしょう。お察しの通り、「力太郎」をヒントに執筆したものです。しかし、このお話の「力太郎」はどこか勇者とはかけ離れています。

それでは、続きです。

金平家を祝するかの様に朝日が照らしている。
ベランダの朝顔が、色とりどりのラッパの様な花を
咲かせている。

リビングには昨夜、金平夫妻が儀式に使った祭壇、ロウソク、
短剣、香炉、ペンタグラムといったものが散乱している。
昨夜は徹夜で白魔術を行っていたようだ。

祭壇の前では、白装束に身を包んだ良純が朦朧としていた。
清美はまだ呪文の様なものを唱えていたが、その両手には
赤ん坊ほどの大きさの白いフケで出来た人形の様なものが
抱えられていた。

良純「こ、これで、いいのか？」
清美「魂も入ったわ、後は待つだけよ」

清美はそう言うと、ソファーの上にそのフケで出来た人形
をのせた。

良純「本当にこれが命を？」
清美「そうよ。それより、名前を考えましょうよ」
良純「名前って、まだわからないだろ」
清美「だって妊婦さんはみんな、お腹の中に子供がいる時に
　名前を考えるでしょ」

そう言った清美の顔は、今まで見た事がないほど幸福のオーラ
に包まれていた。清美の晴れやかな笑顔を見てると、それが例え
フケで出来た人形だろうと、それで幸せなのならそれで十分では
ないかと思えてきた。

清美「フケタロウってどう？」
良純「フケタロウ？」
清美「力太郎っていう昔話、覚えてる？」

良純「老夫婦が垢で子供を作るってやつだろ？」
清美「私達もあの話に似てるでしょ」
良純「似てるけど、俺達はフケだろ」
清美「だからフケタロウ、良いでしょ」
良純「ベタな気もするけど、清美が良いなら」
清美「じゃあ決まり、フケタロウ！」

フケタロウ「あいよ~]
良純と清美「えぇえ！！」

振り返ると、今まで白いフケの塊だったフケタロウの顔が血色を帯び、目、鼻、口、耳に加え、薄い頭髪も生え、人間の赤ん坊の様になっていた。

まさか本当に命を持つとは思わなかった。横にいる清美を見るとやはり半信半疑だった様で、全身が小刻みに震えていた。

フケタロウ「オイラの事、あんた達が生んだの？」
良純「ああ、そ、そうだよ」
フケタロウ「じゃあ、オイラの両親だね」
清美「ええ、そうよ、あなたは私達の子供よ」
フケタロウ「ご苦労さん」

そう言うとフケタロウは、素っ裸のまま、冷蔵庫へと歩いていった。

やはり赤ん坊らしくふらふらと歩いていたが、その歩く後ろ姿には赤ん坊らしさが感じられなかった。

良純「なんかあの喋り方、おっさんぽくないか？」
清美「気のせいよ」
良純「それにあの歩き方、酔っぱらいみだな」
清美「まだ生まれたばっかだから、そう見えるだけよ」
良純「そうかな……」

フケタロウは、金平夫妻の会話もそっちのけで、冷蔵庫の中に頭ごと入れて何かを探していた。

フケタロウ「いいもんみっけ！」

そう言ったフケタロウの手には、小皿に入った良純の晩酌の
つまみの枝豆が、握られていた。

フケタロウ「酒のつまみには、やっぱ枝豆だね！　ちなみに
ビールはどこかな？」

金平夫妻は枝豆をクチャクチャと食べるフケタロウを見つめな
がら、暫くの間、動けなかった。。

金平夫妻の念願の子供は、自分達のフケを白魔術の力を
借りる事によって、誕生させる事が出来た。

だが、そのフケタロウは、姿形は人間の赤ん坊と遜色がないが
中身は完全におっさんだった。

フケと昔話の力太郎をベースに付けた名前、フケタロウ。
フケタロウは、金平夫妻の予測を遥かに超えて、圧倒的に
老けていた。。

7　勇者？

フケタロウが誕生してから三ヶ月が経った。

フケタロウは毎日の様に飲んだくれていた。

その日も仕事を早々と終えた良純が、近所の酒屋で買った
三本の缶ビールをもって、玄関の扉を開けるとオムツ姿の
フケタロウが突っ立っていた。
その腹は、完全にビール腹となっていた。

フケタロウ「遅かったな」
良純「これでも急いで帰ってきたんだよ」

フケタロウは良純の缶ビールを発見するや否や、ひったくる様に
缶ビールを取ると、一本をその場で飲み干した。

フケタロウ「スーパードライ！」

某ビール会社のCMの真似をしたフケタロウは、残りの二本を
オムツの中に入れると、脱兎のごとく走り去っていった。

良純「一本は俺のだからな！」

フケタロウの言動に頭がきた良純がリビングに駆け込むと
フケタロウが野球中継を観ながら枝豆をつまみにビールを飲
んでいた。その横で清美も寝そべって枝豆を食べている。

清美「あら？　おかえりなさい。どうしたの息せき切って？」
良純「なんでもないよ、ご飯は？」
清美「レトルトのカレーだけど」
良純「もう三日もレトルトカレーだよ」
清美「わかったわよ、じゃあなんか作るわ」
良純「頼むよ」

フケタロウとの生活が始まる様になって清美はどんどん
ずぼらになっていった。それもこれも、毎日の様にフケタ
ロウが、昼も夜も問わず、清美を酒に付き合わさせるから
だ。

一度その事を、フケタロウに戒めた事があるが
「酒は百薬の長だ！」と言って全く聞く耳を持たなかった

そんな不摂生が祟ったのか、清美のフケも一層と多くなった。
良純もフケタロウへのストレスと外食が多くなり、フケが多く
なった。

力太郎の物語の中では、物臭な老夫婦の間に生まれた大食漢
で怪力の力太郎が、化物退治の旅に出て、退治したその褒美
で、老夫婦に楽をさせてあげるのが、一般的な説だ。

だがこのフケタロウ、単に飲ん兵衛で、力も成人女性ほどしか
なく、暇さえあればオヤジギャグを言っていて、取り柄と言え
る様なものは何一つ無かった。

そんなある日、フケタロウがいつになく深刻な顔で金平夫妻の
前に現れた。

8　旅

フケタロウ「旅に出る……」

清美「旅？」
フケタロウ「お世話になった両親に恩返しをする為の旅だ」
清美「そ、そうね、例の旅ね！」
良純「ついにこの日が来たか。。　酒代だけでいつも給料が素っ飛んでたからな。しっかり恩返ししてくれよ！」
清美「それで、どこに行くの？」
フケタロウ「箱根だ」
良純「随分、近場だな」
清美「箱根に化物なんかいた？」
良純「化物って時代じゃないだろ、きっとそれに代わる何かをして俺達に恩返しするつもりなんだよ。そうだろ、フケタロウ？」
フケタロウ「ま、そんなところだ……」
清美「確か力太郎の旅立ちの時は、金棒なんかを用意してたわよね」
良純「あれは昔話だ。今の時代に金棒持ってたら捕まっちゃうよ」
清美「じゃあ、何を用意すればいいのフケタロウ？」
フケタロウ「五万円をくれ」
良純「五万円？　そんな大金、何に使うんだ？」
フケタロウ「修業だ」

そう言うとフケタロウは神妙な顔つきでリビングの隅にあるフケタロウが自分で作った、お酒の神様を祀る神棚の前で、ぶつぶつとお祈りを始めた。

良純「五万なんて金あるか？」
清美「へそくりならあるけど、本当に渡すの？」
良純「フケタロウに金を渡すのは癪に触るけど、後で何倍にもなって返ってくるんだから、投資だと思えば安いものさ」
清美「信じるの？」
良純「信じる以外ないだろ。大体、フケで作った人形が命を宿す事自体、奇跡なんだ。それに酒代だけで相当の赤字だ。勝負に出る

　以外ないだろ」
清美「わかったわ。ただ一つ、気になる事があるの」
良純「なんだ？」
清美「あなた温泉ツアーなんて申し込んだ？　確認の電話が
　あったの」
良純「そんなの申し込む訳ないだろ。第一、大浴場の温泉に俺が
　入ったら、フケで真っ白になっちゃうの知ってるだろ」
清美「そうよね。じゃあ間違いね」
良純「否、ちょっと待って、それってまさか……」

良純はぶつぶつと祈りをあげているフケタロウに静かに
近付くと、オムツからちょこっと出ている携帯電話を
そっと抜き取った。

清美「大丈夫？　勝手に見るとまた大泣きするわよ」
良純「確認するだけだ」

良純はフケタロウの携帯を開くと、一件の新着受信メールを
開いた。

その件名には、箱根大人の温泉ツアーと書いてあり
「この度、『箱根デラックスコンパニオンと五万円で一緒に
温泉で遊んじゃおー』ツアーのフケタロウ様のお申し込みを
承りました」と書いてあった。。

その晩、良純は抵抗するフケタロウを強引に物置に閉じ
込めた。

物置きの中では、自暴自棄になったフケタロウが一晩中
大声で、日本全国酒飲み音頭を歌っていた。

翌朝、物置きを開けてみると憔悴しきったフケタロウが
プルプルと震えながら

フケタロウ「暗い所だけはやめてくれ」

と言って泣きついてきた。

その日は朝から、体にまとわりつく様な粘っこく生温かい
不気味な風が吹いていた。

気象庁によると、今夏の記録的猛暑により、海水温が異常に
温められ、最大瞬間風速100メートルという戦後史上最大の
超大型台風が進路を変え日本列島を直撃するとの一報が早朝
のテレビからしきりに聞こえてきた。

すでに各地では河川の氾濫、土砂崩れで多数の死者が続出。
なおも勢力を拡大し、関東平野直撃の恐れから政府は大規模
な避難勧告を発令した。

街中には自衛隊の戦車やヘリなども出動する、世紀末映画
さながらの様相となった。

良純はこの日、会社が休日だったので、かねてから気に
なっていた屋根の雨漏りを修繕をする為に、早朝から
屋根瓦の上に乗っかっていた。

良純はこの国難ともいえる台風が来ている事を知らなかった。
なぜなら、フケタロウにテレビを奪われ、ここ三ヶ月は
テレビをほとんど観ていなかった。

清美は大型台風が来ている事を昨晩に知ったが、昨夜も
フケタロウに晩酌を付き合わされた為、まだ寝床の中だった。
早朝の六時に、清美の携帯電話が鳴り響いた。

清美「はい……もしもし？」
良純「俺だよ、おはよう」
清美「あら、あなた？　すごい音ね。風？　今どこ？」
良純「屋根の上だよ。週末に雨漏りの修理するって言ったよ」
清美「そうだったわね。でもそういえば、台風が来るって言ってた

　わよ」
良純「台風？」
清美「超大型だって、テレビで言ってたわ」
良純「なんだ早く言ってくれよ」
清美「ごめんなさい、だから今日はやめましょう」
良純「でも、瓦も割れてて、漆喰もボロボロだから、とりあえず
　何か被せて、今度、業者を呼ぶよ」
清美「わかったわ」
良純「ビニールシートとかあったろ、持ってきてくれる？」
清美「ビニールシートなんてあった？」
良純「この前フケタロウが海水浴に行った時に使ったのが
　あるだろ」
清美「プーさんのね」
良純「そうそれ」
清美「わかったわ、すぐ持っていくからあなた気をつけてね」
良純「わかったよ」

　　電話を切った後、清美はすぐにビニールシートを探したが
　　なかなか見つからなかった。リビングを見るとフケタロウが
　　オムツ一丁でいびきをかいて寝ている。よく見ると
　　フケタロウの体の下に探しているプーさんのビニールシート
　　が敷かれていた。

清美「なんだ、フケタロウが使ってたんだ」

　　フケタロウを起こさない様にして（起こすと大泣きするので）
　　シートを取ろうとしたが、予想以上にフケタロウが重くなか
　　なか取る事が出来なかった。

　　そうこうするうちに、大型台風はすぐそこまで接近していた。
　　大粒の雨が降り出し、暴風雨となって良純を襲い始めた。

良純「ぐわっ、やばいなこりゃっ、清美なにやってんだ」

　　三十分程して、レインコートに身を包んだ清美が現れた。
　　その頃には風は、街角の看板を簡単に吹き飛ばすくらいに
　　強くなっていた。

避難勧告によって辺りの住民も避難し人気もなくなり、
昼近くだというのに黒く分厚い雲に覆われ夜の様になった。

清美「あなたごめん！　遅くなったわ！」
良純「何してんだよ！　いいから屋根に向かってシートを
　投げてくれ！」
清美「危ないから今度にしましょう！」
良純「いいから！　早く投げろ！」

清美が力一杯に投げたシートは、風に煽られ、金平家の屋根
のすぐ側の庭に生えている樹齢三十年の桜の木に引っ掛
かった。

良純はそれを見ると、屋根から桜の木に飛び移ろうとした。

清美「あなた！　危ないからやめて！」
良純「大丈夫だよ！」

良純は勢いをつけて、屋根から桜の木に飛び移った。
しかし、強風が良純を煽り、良純は枝にズボンが引っ掛かり
半ば宙づりの格好になってしまった。

良純「うわぁぁ！　」
清美「あなた！」

台風はさらに勢力を増し、人一人を簡単に吹き飛ばす程の力に
なっていた。このまま良純が風に飛ばされて、地面に墜落でも
すれば、無事では済まないだろう。清美は助けようにも自分が
飛ばされない様、桜の木にしがみついてるだけで精一杯だった

その時だった。

玄関のドアが『バタン！』と開き、フケタロウが例の
日本全国酒飲み音頭を熱唱しながら、力強い足取りで
しがみつく清美に歩み寄って来た。

フケタロウ「酒が飲める！　酒が飲める！　酒が飲めるぞ～！」

清美「フケタロウ？」
フケタロウ「後は俺に任せろ」
清美「何言ってるの、また酔ってるの？」
フケタロウ「任せろって言ってんだ！」
清美「フケタロウ？……」

　　いつもとは雰囲気の違うフケタロウに動揺しつつも
　　清美はフケタロウに期待した。

フケタロウ「良純、大丈夫か！」
良純「フ、フケタロウ！」
フケタロウ「清美！　お前のフケを集めて俺によこせ！」
清美「私のフケを？」
フケタロウ「いいから早く！」

　　有無を言わせぬ鬼気迫るフケタロウに恐れをなした清美は
　　急いで自分のフケを、風で飛ばない様に脱いだレインコート
　　に集めてフケタロウに渡した。

清美「これでいいの？」
フケタロウ「よし」

　　フケタロウはそう言うと、集めたフケをいっぺんに口から
　　吸い込んだ。すると見る見る間にフケタロウの体が、屋根に
　　届かんばかりの巨体となった。

清美「フケタロウ、すごい！」
フケタロウ「当たり前だ」

　　フケタロウは巨大化すると共に甲高い声も、低い声になった。
　　良純が宙づりになっている桜の木にフケタロウは近付くと
　　桜の木を折れんばかりに揺すって良純を落とした。

良純「落とす事ないだろう！」
フケタロウ「大きくなって、力もある所を見せたかったんだ」

　　暫くするとフケタロウは元の小さなフケタロウに戻った。

清美「とりあえず助かって良かったわ、家に入りましょう」
良純「そう言う訳にもいかなそうだ……」

振り返ると、さっきまで暴風雨だった台風が、今度は竜巻となってすぐ近くまで来ていた。それはとてつもなく巨大で真っ黒な竜巻で、家や車や木々を簡単になぎ倒し、巻き上げながら良純達に襲いかかろうとしていた。

清美「竜巻じゃない！　あんなのに巻き込まれたら死んじゃうわ！　早く逃げなきゃ！」
良純「否、もう無駄だ……竜巻のスピードは尋常じゃない。家には車も無い、走った所ですぐに追いつかれる……」
清美「それじゃあ、このままあきらめて死ねっていうの？」
良純「自然の力には敵わない……」
フケタロウ「あきらめるのか？」
良純「しょうがないだろう」
フケタロウ「粋じゃないね」

そう言うとフケタロウは、両足を大きく開き、大きく深呼吸をすると地面に向かって力強く四股を踏み始めた。フケタロウの顔はみるみる上気していって真っ赤になっていった。

10　超巨大化

清美「フケタロウ、何をするの？」
フケタロウ「もう一度、巨大化する」
良純「巨大化してどうするんだ？」
フケタロウ「あの竜巻と闘う」
良純「馬鹿言え、そんなの無理に決まってるだろ」
フケタロウ「お前達のフケをとにかく取れるだけ集めてくれ」
清美「あの竜巻は巨大すぎるわ」
フケタロウ「いいから早くしろ！　死にたいのか！」

迫り来る巨大竜巻を目の前にして覚悟を決めた
良純と清美は、必死に頭を振って、自分達のフケを
レインコートに集め始めた。

フケタロウ「清美！　フケを団子の様に丸めろ！」
清美「わかったわ！」

集めたフケを、良純と清美はこねてサッカーボール大の
団子にした。フケタロウは団子状になったフケ団子を
パクパクと食べ始めた。

すると見る間に、桜の木よりも大きくなり、顔つきも
鬼の様になっていった。

フケタロウ「もっとだ、もっと団子を作れ！」
清美「もう限界よ！」

頭を振りすぎた良純と清美は地面に倒れ込んでしまった。
巨大竜巻はもう目の前にまで迫っている。このまま竜巻と
闘うには、フケタロウはまだ小さ過ぎた。

良純「ちくしょう！　これまでか！」
商店会長の多真雄「まだあきらめるには早い！」

気付くと商店会長の多真雄さんと商店会の人々が
金平家の庭に集まっていた。

多真雄さんはフケタロウの飲み友達でフケタロウの唯一の
理解者でもあった。

フケタロウ「多真雄さん！」
多真雄「フケタロウ君！　君達が竜巻と闘う勇敢な姿を観てたら
　私達だけ逃げ出す訳にはいかないだろう！」
良純「皆さん……」
多真雄「商店会の中でも、フケの多い連中を集めた。こいつらを
　使ってやってくれ」
フケの多い連中「おお！　フケタロウ！　俺達も手伝うぞ！」
フケタロウ「よし！　俺にどんどんフケをよこせ！」

商店会の連中も必死に頭を振ってフケを集めた。良純と清美も
再び立ち上がり、フケ団子を作ってフケタロウに食べさせた。
フケタロウは雲にも届かんばかりに巨大化した。

フケタロウ「よし！　これで竜巻と闘えるぞ！」

フケタロウは竜巻に突進していった。竜巻はさらに威力を
増し近付いてくる。

空には自衛隊のヘリも出動し、リアルタイムでフケタロウと
竜巻の闘いをテレビで放送した。

フケタロウと竜巻が衝突した！

『ギュバ、バ、ババーーン！！』

辺りには金属音の様な音が響き、朦々と砂煙が舞った。
巨大竜巻の周りの風は、もはや刃物の様に鋭利になっていた。
砂煙から現れたフケタロウの全身は切り刻まれ、血だらけと
なっていた。

それでもフケタロウは竜巻を相撲の様に四つに組んで離さず

目だけはらんらんと光っていた。

商店会のみんな「フケタロウ頑張れ！　フケタロウ頑張れ！」

いつのまにかフケタロウに頑張れコールが起こっていた。
日本中のみんなが、フケタロウを見つめていた。
良純と清美は、血だらけになって闘うフケタロウを見て
るうちに、涙が止まらなくなった。

良純「フケタロウ！　もういい！　こんな馬鹿な事やめろ！」
清美「そうよ！　無駄な闘いよ！」

良純と清美の声に気付いたフケタロウがゆっくりとこっちを
見た。

その顔は鬼の様な形相から一変してとても物悲しい顔だった。

そういえばこの顔、何度か見た事がある……。

良純と清美が自分達の将来設計について意見の食い違いから
喧嘩になった時。。

子供が生まれない理由を体のせいにした時。。

フケ症である事を必死に隠そうとしていた時。。

フケタロウは、いつも悲しそうな顔をしていた。。

いま思えば、フケタロウはみんな分かっていたんだ。

どうにもならない事を、どうにかしようとする
愚かな僕達を。。

そして、最後の最後では、いつもあきらめている
表面的な私達を。。

いつも酔っぱらって、裸同然で、変な歌を歌っていて、
子供のくせにちょっとエッチで、すぐに泣くフケタロウ。

だけど、みんなに愛されていた。

そして本当は、誰よりも正直で、誰よりも最後まで
あきらめていなかった。

なんで気付かなかったんだろう。これが最後だと分かって
いたら、もっと一緒に飲んだり騒いだりしたかった。。

良純と清美は、目を合わせると力を振り絞ってフケタロウに
叫んだ。

良純「お前は俺達の！」
清美「子供よ！」

その時のフケタロウの顔は今でも忘れない。
とっても、とっても、幸せそうな顔だった。
そしてフケタロウは最後にこう言った。

フケタロウ「生んでくれてありがとう」

フケタロウはそう言うと、最後の力を振り絞って、竜巻を担ぎ
上げた。そして、遥か上空へと飛び立っていった。。

その夜、東京に雪が降った。。。

夏に雪が降ったという事で、世界中のメディアや学者達が
注目した。

けれど、雪の正体はフケだった。

フケタロウが自分を犠牲にして降らした雪だった。

みんなは汚いと言って嫌がったけど、金平夫妻だけは
いつまでもその雪をみつめていた。

とてもあたたかい雪だった。。

そして、三年が経った。。。

時の流れとともに、フケタロウの事もみんな忘れていった。
街の片隅に建てられたフケタロウの功績を讃えたブロンズ像も
今では鳩の住処になっていた。

良純と清美はあいかわらずの生活を送っている。

フケ症の方は幾分、良純も清見も症状が和らいだようだ。

休日には二人で映画を観る様になった。フケタロウの様に
枝豆とビールを飲みながら。何も考えずに。。

大きく変わった事といえば、清美が妊娠した事だ。

フケタロウがもしいたら、きっと喜んでいたと思う。
子供の癖に、子供がすごく好きだったから。

今でもフケタロウが作ったお酒の神棚はリビングにある。
それに冷蔵庫の中にはフケタロウの分のビールも。

いつ戻って来ても、フケタロウが泣かないために。。

END